ゆかたの着装体験を通じ伝統文化の伝承をめざした教育プログラムの開発

教育学実践専攻　教育デザインコース　家政領域
13AW115　大矢　幸江
指導教員　薩本　弥生

１．背景と目的

2006 年の教育基本法の改正では、教育目標として「伝統と文化を尊重」や「我が国と郷土を愛する」等が示された。それを受け、中学校の技術・家庭科の学習指導要領では、「和服の基本的な着装を扱うこともできる」が盛り込まれた。本研究室では「ゆかた」の着装を通した教育プログラムの開発に取り組んでいる。授業を受けた生徒は、きもの文化への興味・関心が喚起され、伝統文化を尊重する芽が育まれる効果が期待できる。しかし、実際の教育現場では「和服の着装を扱う」授業は浸透していない。なぜ、ゆかたの着装を扱う授業が普及しないのか調査し、改善策を検討することを第一の目的とする。さらに第二の目的として限られた時間数の中で、ゆかた着装学習の前後でどのような授業が効果的か、校種により違いがあるか等を考察し、伝統文化の伝承をめざす授業内容を提案する。

２．内容・方法

①衣生活分野の伝統文化に関わる教育の歴史と現状

家庭科の衣生活分野の和服の文化について学習指導要領の変遷を調査するとともに、現在の小中高校の教科書において、和服文化取り扱いについて現状を把握する。

②教員研修がきもの文化の授業に果たす役割

平成 22～25 年度に教員研修として横浜国立大学 102 名、埼玉大学 81 名、山梨県立大学 14 名 計 197 名を対象にきもの文化に関する講義およびゆかたの着装を含むワークショップを実施し、この研修に参加した教員を対象にアンケート調査を行い、きもの文化への知識や授業実践の実態の把握および研修が果たす役割を明らかにする。

③きもの文化に関わる授業の指導内容の提案

平成 25～26 年に附属中 1 年生 134 名、公立中学 2 年生 154 名、県立高校 2 年生 221 名、県立高校 3 年生 21 名、公立中学 1 年生 132 名の計 662 名を対象にゆかたの着装を含む授業実践を実施し、授業前後でアンケート調査を行う。アンケートの分析や教員へのインタビューから、きもの文化への興味関心を高めるのに効果的な授業提案を行う。

３．結果と考察

①和服が日常着であった時代は、伝統という記載はなかったが、2008 年の学習指導要領改訂から和服が伝統文化として登場した。伝統文化の中でも和服に関する教科書での記載

は、小学校ではほとんど扱われておらず、中学校ではゆかたの着装が扱われている。しかし、高等学校では衣生活分野の伝統文化についての記述は見られるが、実践・実習という形での体験的学びは少ない。高等学校の内容は豊富で多岐にわたるが、着装についての記載は一部である。

②ゆかたの着装を含む授業実践が、学校にあまり普及していない現状を踏まえ、原因として考えられる教師側と環境面の障害因子を教員研修時のアンケートを元に考察した。その結果、教師側の要因として、きもの文化への興味関心と知識や技能面で自信が授業導入に関与していることが明らかとなった。環境面では、ゆかたやアシスタントなどの不足が明らかになったが、不足が授業導入意欲をそぐ直接の原因にならないことが示され、レンタル利用などで解消できると考えていることが明らかとなった。今後、教員研修の機会を増やし、保護者や地域のボランティアなどの人を活用することが課題である。また最近では、中学校に出向き生徒に着つけを教える和装教育団体が現れている。このような授業の外部化の動きから、授業とは何かについて考察した。授業とは教師の積極的な働きかけに応えて生徒の積極的な学習活動が生起することで成立すると考える。教師は伝えたいことや、付けたい力を日々の授業や単元の中で生徒に伝え、生徒からのフィードバックにより学習活動は活性化する。ゆかた着装の授業も教師と生徒の相互作用でその後の授業への効果が増すと考える。

③中学校、高校でゆかた着装の授業実践を行い、校種によるきもの文化への興味関心に対する共通点や違いを明らかにした上で、ゆかた着装後の授業で何を扱うと効果的かについて考察した。アンケートより中学・高校の共通点として、きもの文化への興味関心は伝統文化への関心と関わりが深いと示された。相違点としては中学・高校で以下のことが示され、着装後の授業内容の提案をした。中学生は学年が低いほど落ち着きがなく理解度は低いが、ゆかたを着ていつもと違う自分を発見して高揚感を感じていた。よって、ゆかた着装後の授業では、まずは理解習得よりも体験重視による体で感じる内容が有効であり立ち居振る舞いなどを提案した。それに対し高校生は精神的に成長度が高く、自分の着つけの評価もしていた。ゆかたの理解から文化面や構成面の学習などより深い内容へつなげ、主体的に発表したりテーマを決めて調べたりする授業が提案できるとした。

４．まとめ

今後の課題としては、着つけの技能のような幅広い知識や自身を高めるのに効果のある教師向けの研修の充実や地域の人の活用が新たな課題である。また、着装以外のきもの文化の教育効果の評価についても検討の余地がある。最後に、きもの文化を学習する教育的意義について考察した。日本の伝統文化の尊重や継承という意味からも、日本人としてのアイデンティティを育み社会的な意味を持つものということを学ぶという面からも、日常の生活様式を見直すという視点からも教育的意義があるという結論になった。